

マーコット・アンコールの生産安定および品質向上に関する研究

第3報 マーコットの着花と結実

川野信寿・小原 誠・柴 茂・財前富一 (大分県柑橘試験場)

Nobutoshi KAWANO, Makoto OHARA, Shigeru SHIBA and Tomikazu ZAIZEN :

The Yield Stability and Quality Improvements of Murcott and Encore.

3. Flower and Fruit Setting of Murcott

マーコットのハウス栽培における花房のタイプおよび開花・落果(花)について検討したのでその概要について報告する。

1. 試験方法

早生温州中間台接木後3年のマーコット2樹を供試し、樹冠外周部の大部分の結果母枝をラベリングし、花房のタイプおよびすべての花の開花・落果(花)について1日ごとに調査した。花房のタイプは第1図に示した4タイプとした。供試ハウスの温度管理は11月～3月5日の期間は昼温20℃で換気し、夜温は約5℃とした。3月6日以降は昼温28℃で換気し、夜温は4月28日まで約15℃とし、その後は無加温とした。着花量は2樹ともやや多であった。

2. 結果および考察

花房のタイプごとの着花数の割合は $B > A > C > D$ の順に多く、Bタイプの着花が全着花数の6割以上で、A・Bタイプの着花で全着花数の8割以上を占めた。

着花した花の中に花器全体の発育が悪く、特に雌ずいの発育の悪い発育不良花があり、それは全着花数の2割近くあった。各花房のタイプごとの発育不良花の発生割合は $D > B > C > A$ の順に多いが、発育不良花の花数は $B > D > A > C$ の順に多かった。このような発育不良花は健全花より遅れて開花し、開花後10日以内に落果(花)した。

花房のタイプごとの結果率は $A > B > C > D$ の順に高く、樹全体の結果率は10%強であった。結果数の花房のタイプごとの割合は $B > A > C > D$ の順に多く、着花数の多いBタイプの結果数が全結果数の6割以上を占めていた。

A・Bタイプの着花新梢長と結実の関係は着花新梢長が長いほど結実が良くなった。特にAタイプは着花新梢長が9cm以上で結果率が高かった。

第1図に示したBタイプの着花数5花の場合の発育および結実についてみると、開花は頂花>第4花=第5花>第3花>第2花の順に早く、頂花が開花して約1週間後に第4・5花が開花し、1番遅い第2花が開花するまで約11日間要した。この順に花は形態的分化すると思われる。発育不良花の発生は第5花>第2花>第4花>第3花>頂花の順に多く、結果率は第3花>第2花>第4花>第5花>頂花の順に良く、頂花はほとんど結実しなかった。

開花波相についてみると、開花を始めて約2週間後の4月14日に開花のピークとなり、その後長い期間にわたって開花したが、開花のピーク前後の20日間で大部分の花が開花した。開花の2次のピークはなかった。

花房タイプごとの開花波相はA・Cタイプは大きな開花のピークがあったが、花房当たり着花数の多いB・Dタイプは開花の大きなピークがなく、ピーク前後の開花割合が大きかった。

開花時期と結実が開花のピークより少し遅れて開花した花の結実が良かったが、全結果数に占める割合は開花数の多い開花ピーク時が一番多かった。開花始の花は結実が悪かった。

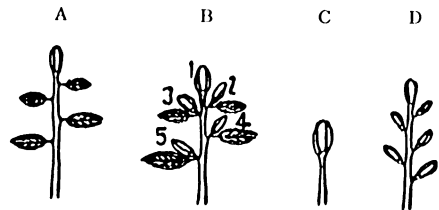
落果(花)波相についてみると、開花始後10日ころより落果(花)が始まり4月25日に落果の1次のピークがみられたが、2次のピークははっきりしなかった。落果はなかった。落果(花)の期間は3カ月間と長かったが、6割以上が始めの1カ月間で落果(花)した。

花房のタイプと落果(花)波相はAタイプの1次のピークが他の花房のタイプより遅れた。

開花から落果(花)までの日数で落果波相をみると、開花後11～20日の落果が1次のピークとなり、2次のピークは認められなかった。

このことから開花波相に2つのピークが認められるか、開花のピークが小さくてピーク以降の開花割合が多いか、または開花から落果までの期間の長いAタイプの花がピーク以降に多い等の要因がなければ2次落果のピークは明確でないと思われる。

果梗の途中に離層を形成した落果とヘタの付け根の部分に離層を形成した落果は1次のピークまでは果梗の途中に離層を形成した落果であったが、1次のピーク以降は混在して落果し、落果時期が遅くなるほどヘタの付け根に離層を形成した落果が多くなった。



第1図 花房のタイプとBの着花位置